

# 出発は遂に訪れず

——高齢者文学人生論

島尾敏雄 (1917-86)

『出発は遂に訪れず』 (1962) 「群像」

『島の果て』 (1948) 「VIKING」

『死の刺』 (1960) 「群像」

『マヤと一緒に』 (1961) 「文学界」

むかし、世界中が戦争をしている頃のお話  
なのですが・・・

島尾敏雄は一九八五年に脳梗塞で死去。葬儀は  
鹿児島市の谷山教会で行われた。

享年六九。だが、あわや二九歳の若さで死ぬと  
ころだった。一九四五年八月十三日、奄美群島加  
計呂麻島で第十八震洋特攻隊長として出撃命令  
を受けていたからである。ところが、発進の命令  
を待っている間に終戦となり、命拾いした。

『出発は遂に訪れず』にはそのときの状況と主  
人公の心理が描かれている。S中尉は出発の準備  
をすっかり終え、発進のかからぬまま、特攻兵を  
眠らせたあとで外浜に出る。すると、死装束を着  
け、モンペをはき、懐剣をかくしもったトエが闇  
の中にうずくまっていた。

『島の果て』によれば、トエは薔薇の中に住ん  
でいる娘だった。カゲロウ島では薔薇の花が年が  
ら年中咲いていて、薔薇垣の葉だらけの、朽葉し  
きつめた庭の中にポツンと母屋から離れているの  
がトエの部屋だったからだ。

そこへ、隣部落のシヨハーテに軍隊が駐屯して  
きた。軍人は百八十一人で、その頭目の若い中尉  
は、まるで昼あんどんのようなようで、むしろ副頭目の  
ほうが威厳があつて、軍人らしかった。

その昼あんどん中尉と薔薇娘のトエとが出逢つ  
て、恋におちいる。それが、「むかし、世界中が  
戦争をしている頃のお話」である。



## 出発は遂に訪れず

高齢者文学人生論

まるで、非現実的な神代の物語のようだが、作者島尾敏雄が現実に関験したロマンスにもとづいている。

中尉は外浜の闇の中でうずくまっているトエに演習だ、演習だと重ねて言ってきたが、トエは動こうとしない。発進の下令が気になり、すぐ彼女を離して、当直室に戻った。

今夜出発すれば自分の生涯は終わりを全うすることができるとも、もし出発が無視されたら、すべてはむしろ悪化し腐りはじめるだろうと、中尉は思った。

翌朝、ふたたび北門の外へ出ると、トエは白昼をあいだに置いて前日からそうしていたと思われる格好で砂浜に吸いつくように坐っていた。なだめすかして、家に帰らせたのが十四日だ。

翌十五日正午、終戦の詔勅放送があり、戦争は終わった。中尉とトエは結婚し、ハッピーエンドとなったが、結婚は人生の墓場であり、その前途には死の刺がある。特攻隊員として名誉の戦死をし、美しい悲恋で終わったほうが幸せだっただろうと、ロマンチックな読者は思うかもしれない。しかし、作者が若くして死んでしまえば、『死の刺』や『島の果てに』や『出発は遂に訪れず』は生まれない。島尾敏雄は六十九歳まで作家として生き、キリスト信者として死ぬ運命を選んだ。

浜千鳥、千鳥よ 何故お前は泣きますか

(ながうらやなきゆる)